
DEATH NOTE 新たなる神

坂田銀時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEATH NOTE 新たなる神

【Zコード】

N31800

【作者名】

坂田銀時

【あらすじ】

キラが死んで再び悪が世界を染めようとしていた。だが、キラが死んで2年後犯罪者たちが心臓麻痺で次々に死んでいった。新たなキラが再び現れたのであった。

プロローグ

「チェックメイト」

「が一冊のノートをひらくの火につけようとした。

「おい、待て！」

「が燃やそうとしているノートの持ち主、死神のリュ クがしに言った。

「そのノートを燃やしても、お前の寿命は延びないぞ！」

「構いません、私はこれで」

再びノートをひらくに近づけた。

「まあ、待て！ 月はこのノートさせあれば神になれるって言つてたぞ！ お前は興味ないのか？」

「…………月君のあの死に方が神の死に方ですか？」

「いや、それは、その、あの」

リュ クは動搖していた。

「私は後23日しか生きれません。もうこれが生涯最後の事件です」
そう言うと「は、ノートをひらくの火をつけた。そして、ドラム缶に放り込んだ。一冊目を放つた後、二冊目を火の中に放り込んだ。そして、二冊の「テスノートは灰となつたのであつた。そして、ノートを燃やしてから23日後、「は静かに息を引き取つたのであつた。」
「が死んで、2年後世界は再び悪が染まろうとしていた。キラの裁きがなくなつたこと、犯罪を犯すものが次々出たのであつた。だが、ある日犯罪を犯した者が次々に心臓麻痺で死んでいったのであつた。毎日毎日、犯罪者が心臓麻痺で死んでいったのであつた。世界中の犯罪者が次々に死んでいったのであつた。

プロローグ（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は分かりません。

「この世は、腐りきつた世界だ」

俺はいつもそう思っていた、キラによる裁きがなくなつてから毎日毎日犯罪を犯すものが次々に出ている。そして、その犠牲がいつも出る。もうこの世は終わつたといつも思つていた。だが、自分が思つていたことが変わるとはまだこの時には気づいていなかつた。

それは、突然来たのであつた。学校の帰り、いつも通学路が工事してため俺はいつもとは別の道で帰つたのであつた。そして、俺がたまたま空地をちらつと見たときなんか黒い四角形が空から落ちてきた、俺は、その落ちてきたものは何か知りたかつたから俺は空き地に入つて、黒い四角形の前にいた。それは、ノートだつた。

「なんだ、これ？ ノートか、なんでこんなものが空から落ちるのか？」

俺は、そう言いながらその黒いノートをとつた。そして、表紙には「DEATH NOTE」と書かれていた。

「DEATH NOTE？ 意味が分からん」

普段なら、こんなもの拾わないんだがなぜか俺は、そのノートを持ち帰つたのであつた。何か不思議な力を感じたのであつた。そして、家に帰り自分の部屋に行きそのノートの最初のページを開いたのであつた。

「使い方？ このノートに名前を書かれた人間は死ぬ、名前を書かれる人物の顔が頭に入つていないと効果は得られない。故に、対象となる人間の名前と顔が一致する必要があるため、同姓同名の別人は死はない。名前の後に人間界単位で40秒以内に死因を書くと、そのとおりになる。死因を書かなければ、全てが心臓麻痺となる。死因を書くと更に6分40秒、詳しい死の状況を記載する時間が与えられる。ふん、遊びとしては結構完成度高いじゃないか」

俺は、小学生が遊びに使つていたノートだらうと思つた。だが、そ

の時に遊び心が出て俺はテレビで流れていた殺人の容疑で捕まつて
いた鏡太郎の名前を書いたのであつた。

「どうせ、死ぬわけないだろ？」「う

と言い俺は、ノートを引き出しにしまつたのであつた。

そして翌朝、俺は朝ごはんを食べながら新聞を見ていたそして総
合面のとこを見て俺は驚いた。そこには、昨日書いた鏡太郎が心臓
麻痺で亡くなつたと書いていた。俺は目を疑つた。まさか、あのノ
ートに書いた人間死ぬなんて、ありえないと思った。そして、俺は
部屋に戻り引き出しからノートを出した。

「このノート、本物か？」

「ああ、本物だ」

「誰だ！？」

俺は後ろ向くとそこには、人間ではないものがいた。

「お前、誰だ！？」

「死神のリュウだ高橋魁よ、そしてノートの落とし主だ」

「このノートの」

「そうだ、だがもうそのノートはもうお前の者だノートが人間界に
落ちた時点でノートは人間界のものになるだからそれは、もうお前
のものだ」

「そうか、じゃあこのノートに名前を書かれたら書かれたの人間は
死ぬのか？」

「そうだ」

俺はその言葉を聞いた時あることを思いついた、そして俺はうつむ
いた。そして、くすくすと笑つていた。

「何、笑つてんだ？」

「面白いことを考えたんだ」

「面白いこと？」

「このノートで世の中を変えてやる…… 悪のない理想の世界に変
えてやる」

「やつぱり、お前もそう言つんだな」

「やつぱりつてどういうことだ！」

「以前に、そのデスノートは8年前にこの人間界に落ちてるんだ。そしてそのノートを拾った人間はお前と同じ考えをしていた、そしてデスノートを使って神になろうとした」

「まさか、その拾った奴つて」

「そうだ、その時にノートを拾った奴がキラだ。悪のない世界を作りつて言つてたなあ」

「キラがこのノートで・・・・・・」

「だが、そいつは2年前に死んだ」

「死んだ！！ どういうことだ！－！」

俺はリュウに聞いた。

「キラが拾つたノートの落とし主リュウ くつていう奴にリュウ クが持つていたノートに書かれて死んだんだ」

「死神が書いたのか？」

死神はうなずいた。

「まさかとは思うが、リュウも俺の名前をリュウが持つているノートに書くつていうことするのか？」

「そんなことはしない」

リュウは否定した。

「そうか、キラは死んだのか・・・・・・なあ、リュウ？」

「なんだ」

「その時に死んだ奴つて誰だ？ もう死んでるんだから教えてくれたつていいだろう」

「・・・・夜神月という奴だ」

「夜神月か、珍しい名前だな」

「それということを教えてやろつ」

「？」

「」はもつこの人間界にはいない

俺は驚いた、キラ事件の捜査をしていた名探偵「」が死んでいたことに驚いた。

「」は、夜神がキラだと断定しキラとの最終決戦をするために自分でノートに名前を書いた

「ちょっと待て、ノートは一冊しかないんじゃ

「その時はノートは2冊存在していた。だが2冊ともしが処分した

「そうだったのか、まあとにかくキラは死んだのか。なら俺がキラの意思をついでやる俺が一代目のキラになつていやる

そうリュウに言い、俺はノートを机に置きノートを開き犯罪者の名前を次々に書いていった。世界中の犯罪者の名前を次々にノートに書いていった。

「リュウ、君はいいものを落してくれたね。これで、僕が真の神になれる」

降臨（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、分かりません。

キラと思われる殺人が世界のあちこちで発生した、これをつけた
国際刑事警察機構は緊急の会議を招集した。

「この一週間で分かつてはいるだけで56人が心臓麻痺で亡くなっています、そして死亡者は全員犯罪者だということです」

ある国の代表者が一週間で死亡した人数を報告した。

「心臓麻痺という事は、いよいよキラが復活したのか？」

「それはないだろう、キラは死んだのだから」

「しかし、こんなことができるのにはキラしかいないだろ？」

「いや、しかしそれは」

各国の代表がキラによる犯行かはたまた、たまたま全員心臓麻痺だったのかということを議論していた。そしてある国の代表が

「皆さん、私に考えがあります」

「なんだ？」

別の国の代表者が言った。

「最近、噂になっている」に次ぐ名探偵「に解決してもう一つしかありませんな」

「「つて誰だ？」

「「とは名前も居場所も顔も知らないだが、世界中の難事件や迷宮入り事件を解決してきた、そして今もつとも「に近い探偵だといわれています」

「しかし、居場所が分からぬのに一体どうやって「」ンタクトをとるつもりだ！？」

「「」はもうこの事件の捜査を始めています」

会議場にその声が響いた、そして一人の男が議長席の前に現れた。

「誰だ！お前は？」

「私は鈴木と言います、今日は」の代理としてきました。どうかお静かに聞いてください、今から」のメッセージをお聞かせします」

そういうと鈴木はパソコンをとりだしてCDみたいのをパソコンに挿入し再生した。

「国際刑事警察機構の皆さん、はじめまして」とです。この事件は世界を又にしたキラによる凶悪な殺人事件です、この事件を解決するためには国際刑事警察機構はもちろん世界中の機関の協力が必要です、特に日本警察の協力を強く要請します」

「が言った後、日本代表が

「どうして、日本なんだ!?」

「それは、『』の事件で最初に亡くなつたのが日本だからです、そしてキラは日本にいる可能性が高いからです」

「何を根拠で?」

「それは、近々キラとの直接対決でお見せすることができます」

「直接・・対決」

「とにかく、今回の事件の捜査本部は日本に置きます

「・・・・・分かつた」

「では、後ほど」

」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は分かりません。

Ｊがキラ事件の捜査本部を日本に設置することを決めて数日後、キラと思われる殺人事件が世界のあちこちで発生しキラにおびえてキラを認める国も出てきた。

「今度は、フランスがキラを認めたか」
机に、デスノートを広げてテレビのニュースでフランスがキラを認めたと報道しているとこを見ていた。

「お前は、これをしたかったのか？」

リュウがリングを食べながら俺に聞いてきた。

「いや、これはまだ新世界の創造が始まったにすぎないよリュウ。俺の目的はただ一つ」

俺は、シャーペンを手に持つて犯罪者の名前をデスノートに書きながら、リュウに言った。

「犯罪を犯すものがいない、理想の社会を築く！」

魁がリュウにそう言った後、テレビの番組に突然番組内容の変更というテロップが出て報道番組に変わった。

「番組の途中なんですが、ＩＣＰＯから世界同時生中継をお送りいたします」

「インター・ポールが！」

俺は驚いた、インター・ポールが全世界に同時生中継をすることなんてないだろうと思っていたからである。

「それでは、始めます」

そう、アナウンサーが言うと画面がある一人の男を映し出していた。

「私は全世界の警察を動かせる唯一の人間、Ｊ・ジョージ通称Ｊです。相次ぐ犯罪者を狙つた連續殺人事件は、ある一人の人間で行われています。それは、キラです」

「！？ こいつどうしてキラだという事がわかつてんんだ！？」

「これは絶対に許されない凶悪な事件です、よつて私はこの犯罪の

首謀者キラを必ず捕まえる。キラお前がどのようにことを考えているなんて想像はつぐが、だがお前がやつてることとは悪だ！！

「…？・・・・・ 悪だと」

魁は椅子から立ち上がりそしてテレビを指差し言つた。

「俺は正義だ、悪におびえる者たちを救い誰もが理想とする世界を作り神になる男だ、それに逆らう者こそが悪だ」

そう言つと魁は、シャーペンを「テスノート」のところに持つて行きそして「甘いぜー、顔と名前を全世界にさらけ出しなんて」

そう言つと魁は、「テスノート」・ジョージの名前を力を込めて書き込んだ。

「俺に逆らおうとビリになるかな」、全世界が注目しているよ。全世界に見せつけてやるキラの復活を」

そう言つと魁は近くにあつた時計を見て秒読みを始めた。

「後、6・5・4・3・2・1」

魁が一と言つた瞬間、画面に映つっていた男が胸を抱えて頭を思いつきり机にぶつけそのまま起き上がりなかつた、そしてその周りにはスタッフが集まり男を囲んで「しばらくお待ちください」というテロップが流れた。

「どうした、なんか言つてみるよー！…」

その瞬間、画面が」と書かれた画像に変わつた。

「信じられない、まさかと思つて試してみたがまさかこんなことがキラ、お前は直接手を下さずに人を殺せるのか？ま、これも計算のうちに入つていたけれど、まさかこんなにうまくいくとは思わなかつた

「なんだ、こいつは！？」

「キラ、お前は一年前のキラとは違うな

「！？」

「今までのキラとは違つ、今までのキラだつたら一年前にこのひつかけ番組やられたことくらい覚えているはず、だがお前は今普通にこの時間帯に死刑となるこの犯罪者を殺した。つまりお前は一年前

のキラとは違ひ

「こいつ！？」

「だが」という私は存在している、これからが始まりだキラお前を必ず逮捕そして、死刑台に送つてやる！！」

そうしが言つた後、画面は砂嵐に変わり画面を通じてのこの推理が終わつたのであつた。

「・・・・・俺を死刑台に送るだといいだひつ抜けてやひつじやないかー！」

衝突（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の月曜日になります。

」がキラに対して、宣戦布告をして数日後「は、キラ逮捕のために捜査本部となる日本に移動したのであった。そして、日本について「は早速、旧キラ事件の日本捜査本部の捜査メンバーを本部に収集したのであった。

「こちらにどうぞ」

「本当に我々を「はが呼んだのか？」

「はい、そうです」

と夜神と鈴木が話していた。そして鈴木が案内した部屋の中に入ると一人の男がいた。

「」、夜神さんとその他の旧日本捜査メンバーをお連れしました」「「」くるり、鈴木」

そつこが言つと「は、すたすたと歩いて旧捜査メンバーの前に現れた。

「皆さんはじめまして、私が「は」です」

と旧捜査メンバーの人たちにあいさつしたのであった。

「はじめて、夜神だ」

「松田です」

「相沢です」

と夜神の後に続いてその他のメンバーが「は」にあいさつをした。そして、全員があいさつし終えると

「それで早速なんだが、どうして旧キラ事件の日本捜査本部の捜査メンバーを召集したのかを教えてくれないか？」
と夜神が「に聞いた。

「皆さんを呼んだのは、皆さんに今のキラ事件の日本捜査本部の捜査メンバーとして参加してほしいからです。皆さんは旧日本捜査本部のメンバーとしてキラを追っていましたよね、そしてキラの正体をつかみそして、キラと直接対決をした。そうですねよ夜神さん」

夜神は何も言わずに首を縦に振った。

「追いつめたまでは良かったのですが、キラは何らかの理由で死んだのですよね」

「な！？どうして、そのことを知っているんだ！」

夜神が驚いた表情をして言つた。

「Jが生きていたころ、私のところにキラは死んだという連絡があつたからです」

「君は、Jとどういった関係なんだ」

「私とJは、お互いに知つてゐる情報を互いに提供し合つていた仲です。でも、さすがにキラがどうやつて人を殺していったかはさすがに教えてくれませんでしたが・・・・・夜神さん」

Jは、夜神の方を見て

「2年前のキラはどうやつて人を殺していたを教えてください、そして、捜査本部に参加してください」

夜神は、下を向いて黙りこんだ。そしてゆっくりと顔を上げ言つた。

「ノートだ」

「ノート？」

「そのノートに名前を書かれた人間は、必ず死ぬというノートだ」「そんなノートが存在していたのか、それでそのノートは今は？」

「ノートはJがすべて処分した」

「第一のキラも同じ方法で？」

「そうだ」

「なるほど、情報の提供ありがとうございます」

「いや、これくらいはそれと捜査本部への参加なんだが」

「はい」

「私たち一同、参加させてもらいたい」

夜神の後ろでは、それにうなづいていた。

「大歓迎です、心から感謝します」

と言つた後、夜神とJは双方の手を握つて握手をしたのであつた。

集結（後書き）

こんには、坂田銀時です。次回投稿は、来週の月曜日になります。

Jが旧日本捜査本部のメンバーと合流したころ、「ノースノートに犯罪者の名前を書いていた魁は手を止め、リュウに質問した。

「なあ、リュウ」

「リングを食べながら、振り向くリュウ。

「どうした、魁？」

「確かにお前は、この『デスノート』に触らないと見えないんだよな」

「そうだ、それがどうした」

「だったら、このノートの隠し場所を考えないとな」

「隠し場所？」

リュウが魁に聞いた。

「そうだ、今までこのノートがほかの人に見つかっても大丈夫かと思っていたが、触られた時点でリュウの姿が見えるのならちゃんとした、隠し場所を考えないとね」

そう言つと魁は、ノートを閉じてノートをバックに入れた。

「さてと、一体どこに隠そつかね」

と言いながら、魁はベットに横になつた。

「なあ、魁」

「なんだ、リュウ？」

「ノートの隠し場所に困つてているのなら、良心ことを教えてやるつ

「いいこと?」

そう言つと魁は、ベットから起き上がつた。

「前のキラは『デスノート』をどこに隠していたと思つ?」

「そんなこと、俺が分かるわけないじゃん」

魁は淡々と言つた。

「前のキラは、机の引き出しの底を二重にしてその底にシャーペンの芯の大きさの穴を開けていて、そこに芯を差し込むと開く仕組みをつくりそこでノートを隠していた」

「どうして、そんなことを知っているんだ？確かに、前のキラについていた死神は違うはずだ」

「そのキラについていた、死神にその話を聞いたんだ」

「そうか、いいことを教えてくれてありがとう。リュウ」
そう魁がリュウに言うと魁は、財布を持って部屋から出た。そして、そのまま自転車に乗って近くのホームセンターに行きいろいろな物を買い、家に帰った。そして家に帰るなり、それを釘で打つたり、ボンドをひつつけるなりいろいろな作業をした。

「何やつているんだ？」

リュウがベットに横になつて、リンゴを食べながら魁に聞いた。

「ノートの隠し場所を作っているんだ、前のキラと同じ方法でノートを隠すつもりだ」

「そうか、ま、がんばれ」

と言いながらリュウは、リンゴを食べていた。そして、数分後

「ようやくできた」

と疲れ気味に魁が言った。

「おーできたか」

とリュウが言つた。

「ああ、割と簡単にできたよ、リュウの話をも元にして作つてみたよ」

と魁は自慢げに言つた。

「そうか、これでノートは大丈夫だな」

「まあ、でも、本当に危ないのは旧キラ事件の日本捜査本部のメンバーと」が手を結ぶことだ。前のメンバーは、デスノートの事を知つてゐるんだろう？」

「そうだ、以前のメンバーは全員知つている」

「厄介だな、さてどうしようかねえ」

と言ひながら魁は再びノートをバックから取り出してノートに犯罪者の名前を書き始めた。

場所（後書き）

こんには、坂田銀時です。次回投稿は、来週の月曜日になります。

魁が「デスノート」の隠し場所を作る終えたころ、キラ事件の日本捜査本部のメンバーはある場所に連れてこられた。

「Ｊ・・・・・・」
「こは

夜神が驚いた顔をして「に聞いた。

「ここは、あなた方が初代のキラを追つていた時に使われていた場所です。」

「どうして、この場所が分かった? ここは私たち以外、誰も知らないはずだ」

と相沢が、身を乗り出して聞いた。

「以前、まだＪが生きていたころに聞いたんです」

Ｊは淡々といい、近くにあつた椅子に座り

「みなさん、たしかノートに触つたことがあるのでしたよね?」

「そうだ」

「でしたら、まだ死神の姿が見えるのでは?」

とＪは、捜査メンバー全員に聞いた。

「いや、それが今では見えないんだ」

夜神が、申し訳そうな顔をしていった。

「ま、そうでしょうね。ノートは、すべて焼却されたのですから」「すまない」

夜神が謝る。

「いえ、それはじょうがないことですから」

Ｊが夜神に言うと、机の上に置かれていた電話が鳴った。

「お! 待っていたものが来たようですね」

と言いながら、Ｊは受話器を取つた。そして話が終わると受話器を戻し捜査メンバーがいる方向を向き

「みなさん、今から皆さんのが驚くものをお見せいたします」

そう言うと、部屋のドアが開きスチールケースを持つた鈴木が入つて

きた。

「」、例のものがワイミーズハウスから届きました」「ワイミーズハウスって、あのワイミーズハウスですか！」

松田が、驚いた顔をしていった。

「そうです、鈴木スーツケースを開けてください」

「はい」

鈴木がそう言つと、鈴木はスーツケースを開けた。中には、一枚の紙が入つていた。

「こ、これは？」

と相沢が頭をかしげて言つた。

「これは、ノートの一部です」

「一部だと、でもノートは焼却されたはずだ！それなのにどうして夜神は、自分の目の前で起きていることを疑つた。

「たしかにノートは焼却されました、しかしには、万が一、ノートが再びこの世に降りつた場合に備えてあえて一ページだけ抜き取つてワイミーズハウスに預けたと言つていました」

「し、が・・・・・・・」

「さあ皆さん、どうぞこの紙に触つてください」

と言いながら、は、スーツケースに入つて、いた紙を取つて、捜査メンバーに見せつけた。

「分かつた」

と夜神が言つと、夜神は、が持つて、いる紙に触つた。そして、そのあとに、続くように、次々に、紙に触つて、いった。

「全員、触りましたね。これで、今あなた方は、死神の姿が見えます」

「そうだ」

「それじゃ、いよいよキラを追い詰めて、いきましょ、うか

「はい！」

と、捜査メンバー全員が、言つた。

展開（後書き）

こんにちわ、坂田銀時です。次回投稿は、来週の月曜日です。

死神（前書き）

「DEATH NOTE 新たなる神」の作者坂田銀時です。このたび、3月11日の宮城県三陸沖を震源とした「東北地方太平洋沖地震」におきまして、津波などで多くの行方不明者・負傷者・死者が多く出ています、被害にあわれた皆様に心よりお見舞い申し上げるとともに、犠牲になられた方々ご遺族の皆様に対し、深くお悔やみを申し上げます。一日でも、早い復興を心からお祈りいたします。

死神

「デスノートの一部を入手し、キラ逮捕に向けて大きく展開したころ。魁は、犯罪者の名前を次々『デスノート』に書いていった。

「順調みたいだな」

リュウがリングを食べながら言った。

「ああ、主だつた犯罪者はすべてノートに書いたと思うよ。あとは、少しずつ犯罪のレベルを下げていって悪のない初代のキラが造ろうとした平和な世界が出来る」

「まあ、がんばれや」

リュウはそう言い、リングを食べ終えた。

「なあ、リュウ。この『デスノート』って本当にこの一冊だけなんだろうね」

シャーペンを机に置いて魁がリュウに聞いてきた。

「そうだ。今、人間界に存在しているのはそのノートだけだ」

「そうか」

そう言つて魁は、再びシャーペンを持つてノートに犯罪者の名前を書きだそうとした時

「お前、なんでいるんだ！」

リュウが突然、驚いた表情をして言った。

「どうした、そんなに驚いた顔をして」

と魁が、笑いながら言つていると魁の頭の上に何かが落ちてきた。

「なんだ……つな！」

魁は後ろを振り向いて驚いた。そこには、人間ではないものがいた。

「リュウ、ク、なんでお前がいるんだ？」

「リュウ、クつてまさか」

魁が驚いた表情をして言った。

「そうだ、魁。こいつが、初代キラにノートを渡した死神だよ」

「なあ、そんな説明いから。俺のノートを知らないか？」

「ノート？」

「さつきおっさんから、まだお前のノートが人間界にあるから回収して来いって言われたんだよ。まったくあのクソじじい」

「おい、ちょっと待て。お前ノートなくなつたんじゃないのか」

「そりなんだが、俺にも見当がつかないんだよ」

「リュ クが、悩んでいると魁が

「おい、リュウこれはどうこうことだー」

「俺にも分からんいんだよ」

死神（後書き）

こんには、坂田銀時です。次回投稿は、来週の金曜日になります。

デスノートの一部を手に入れた検査本部は、キラ逮捕に向けて大きく踏み出したのであった。

「さて皆さん、これで我々はキラ逮捕に向けて大きく踏み出したんですが、まだキラが誰かわりません。そこで、もう一度テレビを使ってキラに呼び掛けてみようと思います」と、Jが言った。

「もう一度、キラに呼び掛けるのか？」

夜神が、Jに聞いた。

「はい、そうです。キラに私たちが、ノートの一部を持つていると発表します」

「それって、キラを挑発することになるんじや」

松田が、冷静な表情をして言った。

「まあ、そうですが、夜神さん。確かにノートには、死神がつくつと仰っていましたよね？」

「ああ、そうだ。ノートの所有者には、必ず死神がつくというルルになつていてる」

夜神が、Jの質問に答えた。

「それを利用して、死神をここへと呼び出して、目の取引をします」Jが「目」と言った瞬間、その場にいた検査メンバーは驚いた。Jは、死神を呼び出して目の取引をすると言つたのであった。

「目の取引だと！」

「そうです夜神さん。死神と目の取引をします。Jの私が」「正氣か」、目の取引をするという事は寿命の半分を削られるということだ。それを分かつていいいるのか

「分かっています、でも、これが最も効果がいい方法なんです」「しかし」

「お願ひします、夜神さん。もつ、これ以上被害は出したくない、

早期に解決するにはこの方法しかないんですね

そう言いながら、Jは椅子から立ち上がり夜神の前に行き言った。

「……本当に、寿命の半分を失うことになるがそれでいいんだな」

「はい、分かっています」

「分かった、君がそこまで言つならやつてくれ

「ありがとうございます、夜神さん」

そう言つと、Jは夜神の手を取つて握手をした。

こんにちわ、坂田銀時です。次回投稿は、来週の金曜日になります。

」が、捜査本部にノート一冊があるという事をテレビを使って公表すると捜査メンバーに伝えてから数日後、テレビで生放送された。「皆さんここにちは、今日は警視庁より重要な発表があるという事で急遽、番組を変更して生放送でお送りしています。では、皆さんご覧ください」

「そう言つと、テレビの画面は真っ白の画面に変わり

「皆さんここにちは、」です

とモザイクがかかった音声が聞こえた。

「今日は、キラにあることを伝えたくてテレビ局の貴重な時間を頂いております。では、本題に入りたいと思います。キラ、私たちキラ事件日本捜査本部は今、あなたがどうやって人を殺せるか知っています。そして、人を殺すのに必要な道具も分かつておりそれを保有しています。キラ、もうあなたの時代は終わります。これから時代はもうあなたは必要ありません……以上で、発表を終わります」

「そう言つとテレビの画面は、真黒になり砂嵐が流れた。

テレビの放送を家で見ていた、魁とリュウとリュクは驚きを隠しきれないのでいた。

「ま、まさかノートが日本捜査本部のところにあるとは意外だつたよ」

と言つながら、魁は頭を上にあげて天井を眺めていた。

「さてと、リュウ。もう俺は行くわ」

「行くのか？」

「ああ、ノートの場所も分かつたしさつもと人間界とはおさらばしたいしな」

「そう言つとリュク クは、外に出ていった。

「これからどうする、魁？」

リュウが魁の方を向いて聞いた。

「どうしようかね、捜査本部にノートがあるところはもうルールの事もばれてるし殺し方もばれているだろ」

「いや、最初から計画を見直す必要があるな」

ヒロウが、本棚の上に置いてあつたリンクを食べて言った。

「そうだね、計画の見直しをしなきゃいけないね」

そう言つと、勉強机の前に行きテスノートを広げた。

「なにする気だ」

「キラは、動搖なんかしてないってこの事を見せつけているんだ」

ヒロウの質問に答えながら、魁は犯罪者の名前をノートに書いていった。

放送（後書き）

こんには、坂田銀時です。次回投稿は、未定です。

Ｊがキラに対してのテレビ放送をして翌日、Ｊと捜査メンバーは捜査本部にいた。

「まだ、ですかね」

「言いながら、Ｊはお茶を飲んだ。

「あれから、一日経つたのに現れませんね」

「そうだな」

松田と夜神が話す。

「そろそろ、現れていい頃なのに」

「もしかして、我々の事に気付いていないじゃ」

と松田が、慌てた表情で言つ。

「それは、ありませんよ。昨日、全部の放送局が放送したんですから気付かないはずないでしょ」

「そうですよね、普通なら気づきますよね」

とＪが言つたことに、苦笑いをしながら言つた。

それから数分後、沈黙した空気が漂つ中その時はやつて來た。

「あ、あなたは？」

Ｊが驚いた表情で言つ。Ｊの目の前にいたのは、死神のリュ　クだつた。

「俺は、リュ　クだ。以前のキラに、ついていた死神だ」

「あなたが……」

Ｊは、口を開けて驚いていた。

「久しぶりだな、リュ　ク」

「久しぶりだな、夜神。夜神、俺のノートはどこにあるんだ？」

そう言いながらリュ　クは、辺りをキヨロキヨロと見渡して言つ。

「ああ、それならちょっと待ってくれ」

と夜神が、ノートの一部が入っている金庫のパスワードを入力し始めた。夜神がパスワードを入力しているときＪが突然、椅子から立

ち上がり

「死神。私と目の取引をしてくれませんか？」

「ん？ 目の取引？」

「の方を向いて、リュ クが言つ。

「はい、私と目の取引をしてください」

「別にしていいもが、あんた寿命を半分に削ることになるがそれで
もいいのか？」

「構いません」

「……そつか、分かつた」

そう言つと、リュ クは」の近くまで行き」の目に向けて手を伸ば
した。

そして数分後

「目の取引は終わつた、これお前は今他の奴の名前が見えるはずだ
」

「そうですか」

」は、リュ クにお礼を言つ。

「んじや、俺は帰るわ。ノートも回収できたし」

と言つて、リュ クは背中を向け羽を広げて飛ぼうとした時

「ちょっと、待ってください」

」が、飛び去る」としたリュ クを止める。

「なんだ？」

「あなたはこのまま、キラが捕まるまで捜査本部に留まつてもらい
ます」

「は？」

「もし、このままあなたが去つてしまえば私は再び目を失つてしま
います。それに、あなたは飛び去ることはできません」

「どういうことだ？」

「そのノートの、所有権は今私が持っていますから。死神はノート
の所有者につくとルールにも書いていますよね」

と」がノートの所有権は自分が持っていると、リュ クに言つと
「ちえ、まつすぐ帰れると思っていたのに。でも、キラとの戦い

を見るつていうのも面白いかもしないな
「では、これからもよろしくお願ひします」
そうつは、言つた。

こんにちわ、坂田銀時です。次回投稿は、来週の金曜日になります。

対策

「がリュ クと目の取引をした頃、魁は自宅の自分の部屋で黙々とパソコンの画面に表示されている犯罪者の名前をノートに書き続けていた。

「しかし本当、この世界は悪を犯す者が多いな
シャーペンを机に置き、手を伸ばしながら書つ。

「どうこうことだ？」

とリュウが魁の横に行き言つ。

「見てみろ」

そう言つと魁は、ノートをリュウに見せる。

「俺がデスノートを拾つてから、たった数カ月しかたつてないのに、ノートの半分のページは使つたのに犯罪者は全く減らない
「まあ、確かにな」

リュウがノートを見ながら言つ。

「でも、犯罪を犯す者は少しづつだが減つてきている。この調子で行つたら、犯罪のない理想の世界ができる」
とパソコンの画面を見ながら言つ。

「これを見てみろよ」

と言つてリュウは、魁が指差したパソコンの画面を見てみると、画面には世界の犯罪の割合が表示されていた。

「確かに、少しづつだが減つてきているな

「そうだろう」

とくすくすと笑いながら言つ。

「今日はこれぐらに、しておこうか

そう言つて魁は、ノートを閉じてノートの隠し場所に置く。

「なあ魁よ。犯罪者の割合が減つたのは言いとしてお前、これからどうするんだ？」が、ノートを持っているんだぞ。このまま」を、放置しておくのか？」「

とワンゴを食べながらリュウが言ひ。

「放置なんかしないよ、一刻も早く」の名前と顔を知らなければならない。でも、どうやって顔と名前を知るかを今、その方法を考えているんだよ」

「そうか、本当に厄介な状況になつたな」

「本当、厄介な状況になつたよ。リュウ」

苦笑いしながら魁は言った。

対策（後書き）

こんにちわ、坂田銀時です。次回投稿は、来週の金曜日になります。

捜査本部では、Jがリュ クと目の取引をして今後の事について話し合っていた。

「これからどうするんですか、J」

松田が聞く。

「……キラと直接、対決しますよ」

「直接……だと」

夜神が驚いた表情をして言う。

「直接キラと対決です。死神、ノートを持った人間は寿命が見えないんですね」

「そうだ、デスノートの所有権を持つている人間の寿命は見えない」とリュ クが言う。

「それを利用して、キラを捕まえます」

「どうやって?」

相沢がJに聞く。

「キラにテレビやラジオ、新聞などのマスコミの力を使って出来る限り再び呼びかけます」

「また、呼びかけるのか」

「はい、そしてその呼びかけの内容は『キラ、今お前の正体は確実に分かつてきているこのままだとお前を捕まえるのも時間の問題だ。そこでだキラ、私たちと取引をしよう。取引をするとき、犯罪者を殺すのに使った道具を持ってお台場の古びた倉庫に来てください』

と

「でも、それってキラを支持している人たちが自分がキラだと主張して結局、意味ないんじや」

と松田が言う。

「まあ、確かにそうですが。その時は、待ち合わせの場所に来た人全員の顔を見ればすぐに分かります。私には寿命が見えています、

寿命が見えていない人こそがキラ

「しかし、キラが来なかつたらどうするつもりなんだ」

夜神が言つ。

「キラは、必ず来ます。そういう奴なんですキラは「しかしだな……」

「もし、キラが来なかつたらその時はその時です。また、新しく作戦を考えたらいいことです」

「……分かつた、君にかけよう」

「ありがとうございます、夜神さん。では早速、松田さん、相沢さん各報道機関に連絡してキラに対する呼びかけをしたいと伝えてください」

「分かりました」

「了解しました」

そう言つて二人は、その部屋から出て行つた。

「いよいよ、キラと決着をつけられる。勝つのは私ですよキラ」

「「よ、本当にこれで決着がつくと思つてているのか?」

リュクが口に聞く。

「もちろん、これで今までのことがすべて終わると思います」

「どうか」

と言つてリュクは、机の上に置かれていたリングゴを食べた。

作戦（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、分かりません。
6月28日にブログで、「二次小説発表会（夏）」をやりたいと
思います。「二次小説発表会」は簡単にいえば、報告会みたいなも
のです。

ブログのURLは
二次小説の館
<http://ameblo.jp/sakagintoki/>
二次小説の屋敷
<http://sakatagointoki.blog.so-net.ne.jp/>

」の作戦は翌日、各報道局により伝えられた。テレビ・新聞ともこのことを大きく報道した。

「キラ、今お前の正体は確実に分かつてきている」のままだとお前を捕まえるのも時間の問題だ。そこでだキラ、私たちと取引をしよう。取引をするとき、犯罪者を殺すのに使った道具を持つて明日お台場の古びた倉庫に来てください」

魁はこの報道を、自宅のテレビを見て初めて知った。

「あいつら、本当にノートの事を知っているのか？」

魁が、疑問に思いながら言つ。

「知つているじゃないのか、おそれらくリュ クが」に言つたんじやないのか」

魁の後ろに立つて、リュウが言つ。

「たぶん、そうだろうね。あの死神が言つたんだろうね。本当、厄介な奴だよ」

と溜息をつきながら言つ。

「どうするんだ、魁よ？」の呼びかけに賛同するのか？」

リュウが聞く。

「そうだね、賛同してみようかな」

ノートに犯罪者の名前を書きながら言つ。

「お台場に、行くのか？」

そうリュウが聞くと、魁はリュウがいる方を向いて

「そろそろ、」を潰さないとこっちも動けなくなるから今のうちに、」を潰さないと」

「そうか、行くのか」

「明日は、面白いものが見えるかもしれないよ。リュウ」

クスクスと笑いながら言つ。

「面白いもねえ、」が死ぬところを見えるってか」

「そうだよ、明日の取引は楽しくなりそうだよ」

そう言って、再びノートがる方を見てパソコンの画面上に出ている犯罪者の名前をノートに書きだした。今、Jと魁の直接対決が始まろうとした。

決戦（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の金曜日になり、次回で最終回となります。

対決

翌日魁は、デスノートを鞄の中に入れてとの待ち合わせの場所お台場の倉庫へと向かつた。そして、倉庫の前に着くと魁は「リュウ、いよいよ」と決着がつくよ」とリュウに言った。

「そうだなでも、もしこれが」の罷だつたらどうするんだ」「罷だつと、これで決着がつく。」かキラかの」

そう言うと魁は、倉庫のドアを開けた。ドアを開けるとそこには仮面を覆つた大人が数名椅子に座つていた。

「初めまして皆さん、あなたたちがキラの日本捜査本部のメンバーですか？」

魁が、仮面を覆つた人たちに聞く。

「そうです。私たちが日本捜査本部です」

一人の男性が言う。そして、一人の男性が椅子から立ち上がり覆つていた仮面を捨て

「初めまして、高橋魁さんいえ、キラ。私が」です」と言った。

「ど、どうして俺の本名を……」

魁が驚いた表情をして言う。

「あなたは、そこにいる死神に聞かされていないんですか？　目のことを」

「まさか、死神と目の取引をしたのか……」

「はい、しましたよ」

「」がそう言うと」の隣に、リュウクが現れた。

「リュウク、お前死神界に帰つてなかつたのか……」

とリュウが言う。

「あ、なんか面白そだつたから」

リュウクが淡々と言つ。

「キラ、今私にはあなたの本名が見えてみます」

「そう言つと」は、椅子の後ろに手を伸ばしあるものを取りだし魁に見せる。

「あなたには、これが何か分かりますか？」

「そう」が聞くと魁は、それを見て

「さあ、分からないな」

と言つた。

「そうですか、実はこれ以前のキラが使つていた『テスノート』の一部なんですよ」

「」が、紙切れをひらひらとさせで言つた。

「嘘だろ？」なんで以前のキラが持つていたノートの一部があるなんだよ」

「では、書いてみましょ」うか？ この紙切れに

と言つと、「」はポケットからボールペンを取り出し紙切れに魁の名字を書きそして

「あと一文字、あなたの『魁』と言つ文字を書いて40秒後にあなたは心臓麻痺で亡くなります」

「そう」が、魁に向けて言つた。

「……書いてみるよ、どうせはつたりだらう。そんな一年前のキラが使つっていたノートなんて、ありえない、絶対にありえない」

「そうですか、今回のキラが以前のキラより劣つていてよかつたです」

「」はそう言つと、最後の一文字を紙切れに書きこんだ。

「これで、あなたとお別れですキラ」

「さて、別れるのはどつちかな？」

「そう一人が言つと、リュウが

「……楽しかつたぜ」

と小声で言つた。そして、40秒後異変が起きた。

「……、そ、そんな」

一人の人間が、地面に崩れるように倒れた。

「どうやら私の勝ちのようですね、キラ

「倒れた人間は、魁だった。

「どうやら、そらしきね。でも、キラの復活でまた戦争はなくなり犯罪の発生確立も7割減少した。いかにキラが、世界にあたえる力が大きいか」

「いえ、あなたはただ人殺しです

「……」

Ｊがそう言つた時には、魁は息を引き取つていた。

「Ｊ、これで良かつたのか？」

一人の男が仮面を捨てて聞く。

「はい、これでよかつたんです。報道メディアには、キラは現れなかつたと伝えてください」

「分かりました」

そう言つと、その男はその場から出て行つた。

「それでは、最後の一仕事です」

そう言つてＪは、紙切れに何かを書きそれをポケットとに入れ

「皆さん、キラの遺体の処理の方はよろしくお願ひします」

と言い残しＪは、倉庫から出て行つた。

それから数週間後、日本捜査本部の解散がＪから通達され日本捜査本部は解散した。そして、それから数日後今度は信用性は低いがＪの死亡が発表された。Ｊが死んだかは誰にもわからないが死亡したというニュースが全世界に流れた。キラの死亡により、世界の犯罪の発生の確率は再び増加しまるでキラが存在していなかつたような世界になつた。

対決（後書き）

「んにじょ、坂田銀時です。今回で最終回とさせていただきます。
今まで、『』ご覧いただき本当にありがとうございました。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3180o/>

DEATH NOTE 新たなる神

2011年9月12日14時58分発行